

風流蝶花形

泉鏡花作

一

「あら／＼萩の花がこぼれるのかと思つたら。」
中庭なる琵琶の池に夕風ゆふなぎの空蒼そらあをく澄すみて晝ひるの月白つきしろ
く水底みなそこに宿やどりたり。池いけは琵琶びはの形かたちしたるなり。汀みぎはに
は丈低たけひくく枝えだの形かたちなる楓かえでの樹きの茂しげりたるが、紅くれなゐの色いろ
を染そめて、彼處かしこ此處こゝ飛と々に七株ななつかぶばかり植うゑられたる、
其蔭そのかげのみ水みづは暗くらうして、灯ひともしたる灯籠とうろうの未いまだあたり
をば照てらさざるが、此隈このくまにのみちら／＼と映うつりて見みゆ。
靴脱くつぬぎの石いしの大おほいなる、たとへば筏いかだの縄切なはきれて、ばら／
＼になりたる如ごとき簫せうの笛ふえの形かたちなり。こもまた樂器がくきに
擬なぞへけむ、篳篥ひちりきもありや、太鼓たいこもありや、飛石とびいしの
處々ところ／＼、袖垣そでがきの下したあたり、かの沓脱くつぬぎの周圍しうゐにも、汀みぎはな
るもみぢの根ねにも萩はぎの花はな咲なきみだれつ。萩をきはあらな
くに其上風そのうはかせの颯さと一陣渡ひとしきりわたれるにぞ、空そらの色いろ、月つきの形なり、
紅葉もみぢの影かげ、はた灯ともの宿やどりたる、一ひとまぜにみだれ重かさな
り、池水いけみづに小波さな立ちて、緋鯉ひしひの背せの六むツ七ななツ打群うちむれ
てフと湧わいたる時とき、樓上むすひの欄らんに倚よりて、清香きよかと名なを

いふうつくしきが、萩の花こぼるゝかと見たりしは、
細かき花片ばかりなる、紫の蝶の狂へるなりき。

「まあ、可愛いことね。」

燃立つ如き緋の長襦袢に水色縮緬の扱帯を絡ひ、
部屋着の袖長く欄干にかけながら、清香が立ちて見
惚れたる、むかひなる階下の長廊下にのしゝと登
音して、やがて植込の間より白きもの見え透きつ。
ツと椽側にはあらはれたるは柏ヶ崎といふ關取なり。
いま湯より上りしと見ゆ、ぬれ手拭をば手にさげつ。
大たぶさの鬢搔撫でながら、鐵の如き額をあげて、
樓上を見たりしに欄干なるは糸の如き其背をばふる
はしつ。見るゝ色をかへてうつむきぬ。

「ちよいと。」

「は。」

「お重どん。」と眉根を寄せたる、鼻高く、眼の色冴え、色いと白く、頬やせたる、紀年は二十六七なるべし、かゝるなかにあるものゝ打身には尚ほ少し。髪をば三輪に結ひたり。すらりとして中背なる、身にはふらんねるの単衣を着て、幅狭き濃い紫の繻子の帯、胸をせめて引締しめつ。似げなく凜々しくとりなしたる、爪はづれの尋常さ、黒き緒の草履をば雪なす素足に引かけて、つむぎの蚊飛白の給羽織紐打結びて着做したる、この菅原の好ぞとよ。薄紫の襦袢の襟にとがひをひたとつけて、キツと瞳を寄せながら、遣手の顔を打視めぬ。

「お重どむ、あのな、彼處に居る關取にはどの座敷が出るんだえ。」

問はれて、小戻りして、傍近く進み寄り、

「あれはね、それ何ですよ。築地の殿様が取巻に連れてお出でなすつたんでね、えゝ、清香さんが出

て居ます。あのまた見上げるやうな大きいのに小さ
いおいらんの人一倍可愛いのが、からむんですもの、
何んなにかうつりがようございませう。」

と莞爾々々して遣手は心なく語りたり、菅原は聞
き居るうちにハヤ少しく色を作して、

「え、誰だと、清香だとね。」

「え。」

といひながら顔の色たゞならぬを、遣手のやうや
く心着きけむ、いぶかしげにぞ瞻りたる。菅原は頷
きたり。

「妹を出しましたね、茶屋は何處だい、茶屋は。」

「山本屋でございますよ、はい、山本屋でござい

ますがね。」

「可し。」

くるりとばかり背向きて、白齒に鬼灯を噛みたれ
ば、床しき音を鳴しつゝ、早足に行き過ぐる、袖を
控へて慌しく遣手は後に引留めたり。

「何でございます。何かわけのあることとござい
ますかね、もし、もし、おいらん。」

菅原は振り返りて、

「大ありさ、な、お前、一體、誰が取持つたんだか知らないが、アノ大々したものに、お前、清香たあ可愛さうぢやあないか。小さなものにさ、ね、ひどいぢやあないか。」

遣手の重も頷きぬ。

「さうですよ、それがね、誰だ彼だと、はじめ云つたんでございます。けれどもおいらん、皆様が去嫌をなすつてお遁げなさるもんだから、ま、あの女にしたんでございますわね。そこへいくと柔順で優柔しくつて、言句をおつしやらないから可うございます。」

「だから、な、なほ可哀さうぢやないか。勤だ、苦界だと思つて、柔順にするからなほ可愛んだね、あの大大したものを取らうとした其時のアノ女の心持を考へてごらん。まだ出てから間もないものを、私なんざ、むかしそんな時は目をまはして恐れたもんだね。眞個さ。茶屋へかけあふまでもないからお前早く取かへておやり。よ、お重どん、可いかい。」

「だつて、何でございますもの。はたらきのある
おいらん達は取らうといひませんし、他に誰といつ
て。」

「ないことがあるものか。働があるも凄まじい、
何だ、ばらがきが大勢居る癖に。可いから彼におし、
あすこの突あたりに、な、夏中暑い／＼ツて呻つて
居た肥満女の、頭痛膏をはつている女があらあね、
あの女におし。可いぢやあないか。」

「いえ、おの方が一番に遁げたんでございますも
の。」

きゝもあへず片頬笑みて、

「可いから、菅原がさういつたといへば取るよ。
言句は入らない。」

「何うして、おいらん、ありや、なかなか。」

遣手はうべなへる色あらず。菅原は聲鋭く、
「ぐづ／＼いふとはり飛ばしてやるから。」

呆れて、

「まあ、」

「可いツてば。」

「だつて、おいらん。」

菅原は語急に、

「面倒なら持つておいで、私が取つて、振り飛ばして遣らう。關取冥利だ、ちつと揉んでやつたら横綱になれやうよ。有難く思ふが可い。」

と冷かに笑ふにぞ、遣手も詮方なげに苦笑して、

「何うも、誠に。」

「内の妹に取らしちやいけないよ。屹度だよ。」
頷くを見て身を開きつ。菅原は肩寒げに羽織の袖を打合せて、またほゞづきを鳴しながら、すら／＼と通りたる、フト其耳を欬てたり。

切れて見やがれ、唯置くものか、

藁の人形に五寸釘。

振返りて、

「何處だえ。」

遣手は二階を打仰ぎぬ。

「異うやつてますね、夕顔様。」

窓々の晝はいとあかるく、廊下の黄昏は暗うして、白けて濁りたるあかりのさすに、菅原は唯一人淋しき影を横たへつ。晝顔と札打つたる、二階の部屋の戸に身を寄せたり。

「ちよいと、ちよいと、何うしたね。」

呼び懸くれど音もせざる、内なる人は眠りてあらむ、障子の外には草履亂れて、ひっそとしてぞ静まりたる、。

「寝てるの、む、このお長屋もおつかれ筋だね。」

いひすて、行懸けしが、一足あとへ引きて立戻れる、菅原が色穩かならず、

「新造衆、新造衆。」

やゝ聲を激まして、

「新造衆は居ないのか。」

「は、誰方。」

とはじめてなまけたる聲して答へつ。外なる人わざと黙したれば問返しぬ。

「は、誰方。」

「江戸ッ兒だ。」

と強^{つよ}くいふ、

「え、菅原^{すがはら}さん。」

といひたるが、太^{いた}く慌^{あわ}てし氣勢^{けはひ}なりき。

「用事^{ようじ}はないがね、ものをいつたら返事^{へんじ}をおし

よ。」

「何^どうも、ツイ、飛^とんだ……」

と立^たつゞけにいふを聞^きき捨^すてに、あたふた障子^{しやうじ}をあけし新造^{しんぞ}をば見^みも返^からで、ツと通^{とほ}り過^すぎて廊下^{ろうか}を北^{きた}へ五七間^{けんへだ}隔^へてつゝ、低^{ひく}き爪弾^{つめびき}の音^{おと}したる別^{べつ}なる部^へ屋^やの前^{まへ}に立^たち止^どまりぬ。

「夕顔^{ゆふがほ}、夕顔^{ゆふがほ}。」

「入^いらつしい。」

といふよりはやく三味^{さみ}の音^ねは八夕^{やっしやう}と留^やみぬ。菅原^{すがはら}は障子^{しやうじ}あくるとて、清^{きよ}らかなる手^てをあけて、そとかけたるに、袖動^{そでうご}きて、小錢^{こぜに}なるべしちやら／＼と袂^{たもと}との底^{そこ}に音^{おと}したり。

うつむきざまにさしのぞけば長火鉢^{ながひばち}のむかひに座^ざして、膝^{ひざ}に三味線^{さみせん}を横^{よこ}へたるまゝ、あふぎ見^みて微笑^{ほくえ}みむかへ、蒲團^{ふとん}を翻^{かへ}して座^ざを譲^{ゆず}りぬ。

「お入んなさいましな。」

「また来やう。お前意氣なことをお遣りだね、誰だえ、お師匠様は。」

「内の新造衆なんです。」

「結構だね。」

「いえお恥かしいでございますよ。」

「何、結構、だがね、お前、いい言句が身に染みると、ぞつとして死にたくなるものだ。また二階で情死でもはじまると悪いわな、ほゝゝ、さ、御折角。」

「まあ、宜しいわ、おいらん。」

「いゝえ。」

とばかり障子を占め、またほゞづきを口ずさみて、草履をば踏みも鳴らさで、する／＼と立去りしが、階子の口を過れる時、いま晝遊びの客を送りて、手を携へて引返せし二人の女にふと出逢ひぬ。

二人は濟しく目禮しつ。この菅原と行違ひ、年の少きが目早く見て、

「おいらん、お櫛が。」

「あい。」と立停る菅原の傍に寄り、手をさし

のべてぬけかゝりし渠がさし櫛を直す次手はら／＼
とこぼれたる後毛をも撫でつけつ。

「もうようござんす。」

といひかけて羽織の袖に何やらむ、塵つきしとて、
拂ひたる、其するがまゝにさせ果てゝ、ものをもい
はず、見もかへらず、悠々と歩をうつして、やがて
其居室に立歸り、すらりと障子を引あけし、次の室
には新造居て、長火鉢に凭りかゝりつ。ハヤ電燈に
灯りて、仄かに白く輝きたり。

「もう暗くなつたね、夕顔さんの部屋なんぞ、未
晝中だに、茲の内は半分仕切ツて表と奥とは晝夜の
様だよ。」

「えゝ、池に向ひました側は早く暗くなるんでご
ざいます。南の三階ぢやあ拂を懸けますのに北の方
の二階では油をつぎ足してるぢやあございませんか。
階子段が眞暗だつたり、憚があかるかつたり、頓と
もう夜も晝もございませぬね。」

いひつゝ座蒲團を直したる、長火鉢のむかひに座
りて、新造がついで出したる湯呑を手に取り、畳み

ありたる新聞を裏表引返して僅に目を着けしのみ傍に棄てつ。

煙管を取りて、片膝立て、襖の蔭より差覗く、十疊敷の森としたる上の室の暗きなかに、翠の絹の艶かに、電燈の光をうけて、玉蟲の群れたる如き夜具の中に身を潜め、紅の蒲團打重ねし眞綿の中に姿をかくして、金糸かけたる高島田、むかふ向に枕して、身動きもせず打伏したる、枕より裙へかけ、兩袖のあつちこち、小さく黒き獸の二ツならず、三ツならず、ちよろ／＼と驅けめぐるが墨絵の動くに異らず。

四

「清香や、鼠にひかれやしないかい。」

と笑みつゝやさしく聲かけぬ。呼ばれて静に枕を返しつ。うつくしき顔を此方に向けて、露垂るばかり清しき目を二つ閨の中にニきたり。

「おいらん、歸りかい。」

「ああ。起きなくつても可いよ、寢ておいで、寢ておいでよ。」

といひながら煙管を倒して、火箸を手にしつ。灰の上に一文字、二ツばかり描いて留めぬ。

「薄ら寒いのね。」

「もう何ですよ。一昨日の晩あたりからすつかり蚊が居なくなりましたよ。」

「また身に染みるんだね、嫌なこつたな。」

と首を低れ、胸に手をあてうつむきしが、ふと思ひつきたる状にて、

「鐵は何うした。」

「また朝顔さんの處へでも参つたんでございませう。やうよ。しやうのない人だことね。」

「可いやな、宵の口から鼠の騒ぐ座敷だもの。私も寐ようや、さ、お前ももう寐てしまひ。」

と襟を合して立たむとしつ。新造は呆れたる顔色

にて、

「だつて昨晚も早くふせりましたり、余りでござ
いますわね。おいらん、」

菅原は微笑みたり。

「此人もつまらない、お長屋なみなこといつてる
ね、客なんか何にするものか、小遣にもなりやしな
いよ。百圓とふつかけると大概ふるへツちまわあね、
膽ツ玉の小さな奴等。私が内職の方が餘程まだ。

チヨイとまた二三枚むいて来たよ、それ、」

といひつゝ袂を探り銀貨、銅貨、紙幣をば取交ぜ、
掌に掴み出して、立ちざまに長火鉢の引出にばらり
と入れて丁とさしぬ。

「さ、お小遣を入れといたよ。翌日また何か見繕
つて、旨いものをたべさしておくれ。些少ふとらう
ぢやあないか。お前もやりばなしに驕るといゝや、
な、内職の方が凄いだらう、何うだ。」

「恐れ入ります。ほゝゝゝ、これぢや苦界もへツ
たくれもあつたもんぢやあございません。お陰様で
毎晩樂をいたします。袖の下をつかつて起番も何處
かへおツつけの、高躰とやらかしませう。新造は寐

ばうか、たんとおしげりなさいまし。」

「奥女中ぢやあるまいし、なあ、清香。」

と何たきしめたる羽織の裏あたりを薰らし、はらりと脱げば、花やかに翻る、主は淋しき單衣のまゝ、上の室に歩み入り、清香の枕頭に坐をくづしつ。蒲團の上に頬杖つきて斜に身を寄せ、近まさりする清香の顔ぢつと見て微笑みながら、白き齒の間より鬼灯を、口うつしに、「さ。」と唇をさしよすれば、はなじろみつゝ、面を赤めて、ソと其口に受けいれつゝ、わざとにはあらで鳴しながら、腕をあげて、膨かに絹の夜具をかゝげたれば紅裏の奥深く清香が寢姿なやかに薰はこゝにもときめきつ。

菅原は寢たりけり。

「入らつしやい。」

といとせめて小さき聲にて清香はいひたり。

「むゝ、おいらんはじめましてだ」

「は、何うぞ末長うお頼み申します。あなた、おいくつで在らしやいます。」

「むゝ、おいら二十六だ。お前はえ。」

「は、十八になりました。」

と袖もて口を蔽うたり。菅原思はずふきいだしぬ。

「何かいつてるね、がいゝぢやあないか。コウ清

香や、ちつとは恐くなくなつたかい。」

「おいらん、御覧なさいまし。」

「何だよ。」

「ね。」

「御覧なさいましなね。もう些少も震へやしませ

んから。」

と眞顔になりて眼を睜りつ。菅原は堪へず、また

笑へり。

「さうさ、お前、女同志でふるへちやあ、あけが

らすの雪だあな。でも清香や。」

「はい。」

「あの關取には困つたらうの。」

「あゝ、姉さん。さつきは難有う存じます、私、

何うしやうかと思つてましたら、内のお定さんが、

もう出なくツてもいゝと、さういひましたら、ほん

たうに拝みましたよ。いつでもあんなぢやあ私、池

へでも入つてしまひますわ。」

と菅原の胸に額をよせつ。前髪をあてゝ縋りたる、

肩かたに腕かひなを懸かけたる時とき、聲音あしおとして、

「おいらんお煙草盆たばこぼんを。そしてお湯ぶつを。」

「あ、鐵てつ、歸かへつたかい。」

「唯今ただいま、晝顔ひるがほさん處ところのお熊くまどんと一緒にいっしょにつれだつて参まゐりました。何なんでございますか、先刻せんこくはおいらん、あなたとも存ぞんじませんで、飛とんだ失禮しつれいをいたしました。あとでお座敷ざしきのにも叱しかられました恐れ入おそります。ツイ晝顔ひるがほさんもふせつて居をりましたもんですから、行届ゆきとどきませんで、何かお氣きにさわりましたようで申まをし訳わけがないとさういひましてね、いずれ、おいらんもあとでお詫わびにあげりますが、あしからずと、さういつてお部屋へやまで参まゐつたのでございますが、おいらん、何どう遊あそばしたのでございますえ。」

菅原すがはらは聞き濟すまして、

「晝顔ひるがほは知らないこつた、新造しんぞに、な。」

「はい。」

「堪忍かんにんすると、さういつて歸かへしておやり。」

「可ようございますか。」

「あゝ。そしてチヨイと、ちよい／＼蟲むしが來きてうるさいから蚊かは居ゐないが蚊帳かやを釣つつておくれ。今夜こんや

清香きよかを放はなさないから、そのつもりだよ。鐵てつや、お前まへも寐ねつちまひな。おい、まだ、それから襖ふすまをしめるんだ。」

五

「清香きよかや、舊もとな、お前まへの此處こゝへ出でた時に、私あてえが駟なじ染みのつれ初會しよくわいで、それお前まへが一座いちざをした時ときさ、アノ時ときだった。私あてえが何なんの氣きもなしに、（大事だいじにお勤つとめよ）とさういつたら、あくる朝私あさあてえの顔かほを見るとお前まへが駟かけて來きて、袖そでにつかまつてさ、覺おぼえておいでだらう。（おいらん、一生懸命いっしやうけんめいで勤つとめました）とさういつたのを聞きいて、ツイほろりとしたことがあつたツけ。それから無性むしやうにお前まへが可愛かはゆくなつて、こんなにな、なかよしになつたんだもの。いますういつ

ちやをかきなものだけれど、さつきの關取のやうな、あんな憎らしい、大々した不具者なんぞ、氣に入らなかつたら斷つてしまふが可い。可から客に取つても振飛ばしておやり。私がついてるのに、何故さういつて、はじめツからお聞かせでない。打明けてお話しだつたら、何、わけのないことをさ、お前そりや水臭いといふものなんだよ。」

「はい。」

と聲をば曇らしたる、紅閨の中しめやかに、

「そんなわがまゝをいひましては、姉さん、お前に苦勞をかけるもの。あんまり甘へて、愛想を盡かされると、悪いからさ。」

「何だ、つまらないことをいふぢやないか。何んなに、我儘だつたつて、甘えられたつて、この人に愛想を盡かされるもんかよ。私が斯うやつて居る内あ、おいらんのお姫様で、お前を立て通してあげやうわ。澤山我儘をいふが可い。」

とがつくりうつむきて頬ずりする、菅原の顔をじつと見て、清香は嬉しげに微笑みつ。

「ぢやあ姉さんや。」

「むゝ、清香や。」

「わがまゝをいつても可いのかい。」

「可いとも。」

「ぢやあね、姉さん。」

「む。」

「姉さんや。」

「何だい。」

「あの、姉さん。」

「何だよ。」

「姉さんたらさ。」

「何だツてば。」

「あら、姉さんといふのに。」

「何だツたら、此人は。」

「ねえ、姉さん、姉さん。何とかおいひよ、姉さん。」

ん。

「懊惱い！」

「あら、姉さんといふのに。」

清香はまとひつきて、

「姉さんから姉さん、姉さんてばさ。」

フと見れば菅原の寝返りして、あちら向きて、眼

を塞ぎたるに縋りつきて身を震はし、

「堪忍して下さいな、ね。」

詫ぶればはやく打解けたり。

「お前、其は悪い癖だよ。憎い蟲だツちやあない。眞個に其をはじめられると承知をしながら腹が立たわね。」

「だからさ、堪忍して下さいな、ほゝゝゝ。」
「他愛もなく打笑ふに、菅原は詮方なげに向き直りて、

「串戯ぢやあないよ、お前、その蟲ぢやあ、いつでも母様を泣かせたといふぢやあないか。」

「は、私はもう死んでもいゝからこれをいつてぢれて見たくツてなりません。何だかじり／＼じりして来て身體は何うでもいゝやうになりますもの。私はこんなことをいひますのは國に居る母様とそれから姉さん、お前さんばかりだワ。」

「いまにまた一人出来ようさ。」

「え。」

「何、お天氣のことさ。母様といやあ御病氣は何うだい。」

としんみに問はれて打悄れ、

「昨日も便があつたんですが、よくないとさういひます。」

「其は困つたね。一體何の煩ひだね。」

「え、子宮から、あの、お腹へ入つて、胸へ來たんですツて、お醫者様がさういふんですツて。」

「其は困つたね。」

「何うしませう、元から弱いんですのに、苦勞はツかりしますから。父上はもう六十になりますし、亡くなつた弟が居ますともう十五ですから、些少は看病もしてあげてくれませうけれど。弟はねー！おいらん。」

「む、。」

「私や小さい時から我まゝもので母様々々やあてつちやあね、あの癖をやりますの。しまひに腹を立つて突きのけやうとしますのを、しつかり袖につかまつてちやあ、振りもぎられる拍子にいつでも母様の袖をびり／＼切りましたんですツて。弟はねー！おいらん。」

「む、。」

「そんなんじやあゝありませんの。其はもう優しい／＼兒でね、十一の時から十軒店に奉公をして居たんですが、些少づゝ貰ふ小遣ぢやあ、私にお雛様だの、釵だの。錦繪だの、なんのツて、買つて來て

くれましてね、それから母様、母様ツて、もう何んなに優しくしましたでせう。其がね十四の時亡くなりましたが。」

いひかけてフと眼をみひらき、仰向になりて清香は見つ。行燈の灯此時幽に、蚊帳の色黒く見えて二人が閨を蔽うたり。

清香は急に思出しけむ。

「おいらん、蝶々には紫のが居りますのね。」

六

「何、紫の蝶々があるえ。」

「先刻ね、何心なしにお庭を見て居ましたら風が

吹いてね、萩の花がこぼれましたの。私、萩の花が散るのだと思つて居ましたが、よく見たら可愛らしい蝶々でした。でも紫ので可かつたワ。おいらん、其時は白い蝶々だつたの。」

「何の時さ。」

「あれ、弟が亡くなりました時さ。ちやうど今頃でございましたつけかねえ。其時、母様も煩らつて、大變鹽梅が悪かつたの晩で、私が枕元について居ました。さうするとね、おいらん、何處から入つたのか、白い蝶々が二ツ立ち込んだぢやありませんか。母様が、あれ／＼とさうおいひで、はじめで私も氣が着きましたの。」

弟が病氣で居ることは、其さきから知れて居たもつですから、母様が熱があるのに、うは言のやうに、（あゝ、嫌な蝶だ、嫌な蝶だ、お清。）ツて私の名を呼んで（三吉）三ちゃんといふのはね、おいらん、私の弟なの。（三吉が亡くなつたんだよ。何うしやう）といつて震へるんですもの。」

かくいへりし時、樓の上下、柱も襖も森としたる
にから／＼と唯一ツ手水鉢に柄杓の音、いづくにか
響きつゝ、二階のはてのはてのはてのなほ其奥と覺
しきに、悲しき端唄聞こゆる折から、鼠出でゝ一め
ぐり弓弦の鳴る音さして、蚊帳の裙にあふりを打た
しぐる／＼と巻いて駈けたる、不意に驚きて枕を欹
て、清香はあたりを見まはしたる、蚊帳の外にも
こそありけれ。引裂紙の切はしの、隙もる風にひら
めく如く、小さき蝶の色白きが上下に番うて居つ。

「あゝれ、あれ、あれえ！ いけませんよ。おい
らん。」

と清香はひたとうつむき伏しぬ。菅原は怪みて、
「何うしたんだよ、お前、何がさ、おや、震へて
居る、何うしたのさ。」

「蝶々が、蝶々が来たんですよ。あゝ、嫌な。」

「何、蝶が、来た、白いのか。」

「えゝ。」

「どれ。」

と菅原も枕を擡げ、只見ればさせる影もあらず、
行燈のみぞまたゝきたる。

「御覽な、何も居やえしないぢあないか、お前氣のせみだよ、詰らない。」

とまた枕しつ。清香はなやましげに顔をあげて、

「確に見ましたもの。」

「氣の迷だよ。」

「さうですか不知。え、あれ、あれ、矢張飛んでるぢやありませんか。」

「一たび菅原が見たりし時はものゝ隈にかくれしなりけむ、いまゝた番うて舞ひ來りぬ。菅原は事ともせで、

「だつてさ、何、蝶が來たつて可いぢやあないか。何でもありやしないぢやあないか。そりや蝶々も入らうしさ、鼠も出やうさ。不思議なことがあるものかね。氣にかゝつたら見ないが可い。」

と掌をもて菅原は清香の兩眼をふたぎ與るとて、其額に指をふるれば、前髪ぬれて冷かに、冷たき汗を掻き居たり。

「いゝえ、いゝえ、何でもないことはありません。あゝ、母様がおなくなりぢやあないか不知。」

「何をいふのだよ。」

「姉さんや。」

「何だよ。」

「あら、姉さんたらさ。」

「何だツてば、またはじまったね。」

「きつと、きつと、母様が死んだんですよ。」

「詰らないことをいふもんぢやあゝりません。蝶々

が飛んだつて何があるものかね。」

「いゝえ、弟の亡くなった時もさうでした。あの

母様が枕元へ蝶々が来たのを見て、きつと死んだの

だつてさういふから、そんなことはありません、そ

んなことがあるもんですかツて、傍から皆がさうい

ふとね。母様が、の姉さんが亡くなった時もちやう

どこんな風に蝶の来たのが氣になつて氣になつて堪

らなくツて、追ひ出さうとさうおもつたら、わきへ

それでお佛壇のなかへ入つちまふと、直ぐしらせが

来たことを忘れないで居る。きつとそうだ、三吉が

亡くなるんだ。何にしてもソツとして追はないで置

いておくれ。また、お佛壇のなかへ消えてしまふと

悪いから》ツて。」

菅原は眉をひそめぬ。

「さういつて居るうちに、父上もうつむいて、なるほどいふ顔色をおしだつたぢやあゝりません。」

菅原はそとあたりを見しが顔の色たゞならざりき。

「それだつたつて何も母様がさうツてことあゝりやしないよ。」

「いゝえ、きつとですよ。おいらん、私や何うしたら可からうね、六年のあひだ待ち切るんですもの。いま亡くなられちや私や何うしましやう、おいらん、姉さん、姉さんたらさ、姉さん！」

「そんなに氣になつたらあしたにも手紙を出してお聞きだといゝ。そして返事がありや無事なことが分るぢやあないか。」

いひなぐさめても頭を掉りて、

「何うして、ほんとうのことをいふものですか。」

母様だつて、いまだに三ちゃんの亡くなつたことは知らないであるですもの。其晩直ぐしらせが來たんですけれど、病に障つちやあ悪いツて、かくしたツきり。もう／＼あの弟をたよりにし切つて居るんですから息災な時だつたつて、そんなこと聞かせや

うもんなら、それこそ落膽して生きちやあ居ませんから、隠し通して、いろんなこといつて欺して、あゝして國へ引込みました時分にも、あはせないでしまひましたんですから、此方から人に書いてもらつて出す手紙を、母様は、弟が手習いをして書けるようになつたんだとばかり、思つてますもの。いま、母上がおなくなりだつて、私に、ほんたうのこといふものですか。手紙で、きいて、まめだつて、いつて、寄越したつて、もう、母様は亡くなつてしまつたんですよ。うそをいつたつていけません。行つて見たくツたつて、年があけなけりや、其處までだつて、うつかり出られない身體ですもの。何うしたつて死んだんですよ。おいらん、姉さん、姉さんたら、何うしやうね、姉さんたらさ。」

「困つたね。」

「よう、姉さんてば、姉さん！」

「困ることね。」

「といひながら、菅原も何やらむ、じつとものおもふ状なりし。言正しく、

「清香や、きつとだね。」

「え。」

「蝶々にそんなことのあるのは眞實だね。」

「ですからさ。」

「可いよ、屹とだね。」

「ですからさ、といふんでさあね。」

菅原は眼を睜りて、細き指を折り敷へつ。口の中に日を算して、また日を算して、身をも忘れし状したるが、いと沈みたる聲をもて、

「清香、何時だらう。」

「もう十二時、いえ、一時半位。」

「丑だね、む、丑の刻、丑・・・。」

と呟きて枕を上げつ。蚊帳ごしにすかし見たり。

「清香、私にもみえるんだ。」

「あれ。」

「實は、はじめの内は見えなかつたが、佛壇の話をした頃から見え出した。確かに二ツ居る、二ツ確かに居るんだよ。」

「あゝ、嫌なねえ。」

「一時だらう。まだ半にやあなるまいと私は思ふんだよ。清香さうぢやあないか。丑・・・。」

「恐うございますワ、おいらん。」

「しつかりおし！」

と身を固めて菅原蒲團にはらばひたり。

「清香や、私が見て居るからお前起きて追ッてごらん、佛壇はないから何うしたツて、此上氣に懸けさせるやうな心配はないから、な、可いかい。悪いことをしらせに來たものなら縁起直した、追ひ出していまふが可い。そしてあした手紙をお出し、どうしても安心が出来なくばさ、私だつて、さしあたり、お前を一日なり二日なり、國へ歸してあげるほどの才覺もつかないから、斯うしやう。うつむいてとか、仰向いてとか、また横になつてとか、お前のすきな姿にして母様の寫眞を撮らして、送つてもらつたら可いだらう。さうすりや確な證據だ、見て安心をするが可い。私が身體は何うなつても、お前にや心配をさせないから、な、さあ、追つてごらん、追つてごらん。」

いはれて清香はいきせきつゝ、

「さうしましやう。もう追ひ出してやるんだ。私、追出してやるんだ。追出して。」

と亂れし裳繕ひあへず、緋縮緬の襦袢の形に、すらりと衾を脱け出でつ。鬢をおさへて膝を立萩てさま、青き煙の籠めたる如き、蚊帳のゆら／＼と掻い上げたる、金絲めらめき、脛白く、紅長き清香の姿。蚊帳の彼方となるまゝに、袖を絞つて肩にかけ、ひらりとかへして振りはたく胸のあたりを立ち去らず、かざしのあたりを立ち去らず、一つは上に他は下に、また舞ひ下り立ちあがり、入れちがひて狂ひつゝ、追ふにつれてちら／＼と蚊帳をめぐりて彼方に飛び、此方に飛びて、白き蝶と、萌黄の蚊帳と紅の清香の姿と行燈のあかりのなかにみだれあひ、もの狂はしげなる状なりし。清香はあれ／＼とばかりにあまり心を激したれば、氣くたびれしてうつかりと、床の柱にみをもたせつ。兩手を垂れてといきをつきめをみはりて打まもれば、幻にちらついたる、二ツの蝶は此時なりけり、次第に眼前を立ち離れ、灯の影となつたりしが白き羽に蚊帳の色の、青きをすかして見る／＼うちに消ゆるが如くうすれ／＼て、此方にみえずなれりしトタン圍の内なる菅原がまたゝきもせて見詰めし瞳に、白くさやかにあらはれつ。羽を休めて留まりしを、凄艶冷絶なる一雙の二いた

眼にキツと見て、蒼くなりて、打ちわなゝき、

「のろひが利いたな。」

と呷きさま、さきより吸ひかけて忘れたる、煙管をはたと落せしが、吸殻矢の如く赤く飛びて、枕元なる疊の上に煙を印してむら／＼と蚊帳を籠めて立ちのぼり、留まれる蝶の姿をかすめて、やゝありて消え去りたるまで、まじろぎもせで瞻り果てつ。仰いで柱にもたれたる清香の顔を一目見しが、
「うむ。」と深痛なる聲を絞りて、天鵝絨の襟を噛み、横さまに身を伏せぬ。

「呀とばかり駈け寄りつ。」

「おいらん。」

「・・・・・・・・」

「姉さんや、姉さん。」

「・・・・・・・・」

「姉さんたらさ、姉さんてば、姉さんてば！」

菅原はものもいはずなりぬ。清香は且怪み、且つ

きづかひ、足つまだてゝ見入りたる、灯をすかす蚊

帳越に煙の如き蒼味を帯びて、眠れる顔ぞ白かりける。

其夜は満願の夜なりしとよ。

菅原が命をかけてのろひたる、渠につれなかりし男のこの一切は、清香が心を安んずべく、やがて其遺書の中に記されき。

【完】

*